

種豚の省力管理試験

一鼻環装着による競合防止ならびに放飼場の荒廃防止について一

野田邦嗣・大津留 公・中林大治郎・加藤正満・荒岳 義
(大分県農業技術センター畜産部)

NODA, K.; OTURU, E., NAKABAYASHI, D., KATO, M. and ARATAKE, H.

Studies on simplification of sow management

The prevention by nose ring from intra-bacon type breed competition
and desolating a yard

目 的

種豚の大型化にともない、広い運動場を持ち、施設費が安く、省力多頭化の出来る種豚の放飼省力多頭管理が行なわれるようになってきたが、当所でも技術確立の為昭和40年より昭和42年にかけて種豚の群飼並びに分娩柵利用による無着護分娩の試験を行なって来た。この試験中に問題となったものに、群飼の際、給水場附近での豚の競合が見られ特に大型種において激しく、群編成時には傷つくもの脱柵するものが見られ年令、体重の異なったものを同一群とすることが困難であった。もう一つの問題点として放飼の際豚の鼻耕つまり豚の鼻による穴掘りのため放飼場の荒廃が目立ち衛生的にも良くないことである。また今後林間地利用が進められると思われるがこの際豚による樹木への被害が予想されるが、これに対する技術の確立がなされていない。そこで現在米英国で豚の穴掘り防止として利用している Hog Ring つまり鼻環を用い豚を林間地に放飼しこの効果の調査を行なった。これは中間成績であるが報告する。

試験方法

試験区にはアルミ又は銅の合金で出来た鼻環を装着用プライヤーで豚の鼻端に装着したものを7頭を、対照区には鼻環を装着しないものを7頭を用い昭和43年6月1日より6ヶ月間それぞれ700 m²の6、7年生の小松林の林間地で飼養した。放飼場は給餌給水場及びコロニー舎を併設し、放飼場の周囲を電牧と有棘鉄線で囲み両区を鉄柵で区切った。

供試豚は第1表のように対照区は群編成時の事故を防ぐため慣行にしたがひ年令、体重差の少ないものを試験区には年令、体重差のあるものを使用した。

第1表 供試豚

試 験 区					対 照 区				
番号	品種	生年月日	産次	体重	番号	品種	生年月日	産次	体重
1	LY	S39. 7. 14	7 産	182 ^{kg}	1	LII	S42. 12. 4	未経産	170 ^{kg}
2	LY	S41. 7. 20	3 産	179	2	LII	S42. 12. 4	未経産	179
3	LY	S41. 7. 20	3 産	171	3	L	S42. 10. 20	未経産	157
4	II	S42. 11. 10	未経産	186	4	L	S42. 11. 14	未経産	151
5	II	S42. 10. 29	未経産	190	5	Y	S42. 8. 3	未経産	142
6	LII	S43. 1. 16	育成	111	6	Y	S42. 8. 5	未経産	145
7	LII	S43. 1. 16	育成	108	7	Y	S42. 8. 15	未経産	138

考 察

豚の競合については、試験区に競合のある様に特に年令体重差のある豚を用いたが群編成時における脱柵等の事故は対照区同様に見られなかった。平常時における給餌給水場及び休息場の豚の勢力差は見られ鼻環の効果は認められなかった。

鼻耕及び樹木の被害について試験開始2ヶ月目に調査したものが第2表である。

第2表 鼻耕及び樹木の被害状況

	鼻 耕 の 状 態			合 計	樹木の倒伏		樹木の咬傷
	深さ 10 cm以下	深さ 11 ~ 20 cm	深さ 20 cm以下		半倒伏	全倒伏	
試験区	2.5 m ²	19.6 m ²	0 m ²	22.1 m ²	5 本	0 本	10 本
対照区	9.3 m ²	36.2 m ²	3.4 m ²	46.9 m ²	8 本	1 本	9 本

* 鼻耕面積は給餌・給水場附近は除く。

放飼場の鼻耕の状態の試験区は対照区の約半分の面積で放飼場の荒廃防止に十分役立つものと思われる。樹木の状態は試験開始時にあった下草、かん木は採食され、2ヶ月目にはかん木も殆どなくなり松は倒伏したのが見られ、これはやゝ対照区に多く又樹木の幹に豚の歯による咬傷を受けたものもあったが試験、対照区ともに差はなく樹木への被害については試験開始後期間が短かく結論は出されませんが今後試験を続け試験調査をしたいと思う。